赤津地区

猿投山の西麓にあたる赤津地区は、陶器を中心とした伝統的な赤津焼の産地です。多くの窯元が軒を並べ、国指定史跡である瓶子窯跡や小長曽陶器窯跡などがあります。

赤津焼会館

開館時間：10：30～15：30
休 館 日：月曜日・火曜日・水曜日
駐 車 場：有
入 館 料：無料

高台に建てられた赤津焼会館は、円筒状の建物の周りを織部釉の陶板で装飾され、深い緑色が美しい印象的な建物です。赤津焼は瀬戸市東部の赤津地区を中心につくられているやきもので、「灰釉」「鉄釉」「古瀬戸釉」「黄瀬戸釉」「志野釉」「織部釉」「御深井釉」の七種類の釉薬と「削り目」「へら目」「たたき」など 12 種類の技法を使って、茶道具から家庭用品まで幅広い製品がつくられています。昭和 52 年（1978）には、「伝統的工芸品」として経済産業大臣（当時 通商産業省 H13～経産省）の指定を受けました。

唐三郎窯

加藤唐三郎家は、江戸時代を通じて尾張藩の御庭焼御用を務めた「御窯屋」でした。美濃国土岐郡郷之木村（現：岐阜県土岐市曽木町）にいた加藤利右衛門景貞と弟仁兵衛景郷は、慶長 15 年（1610）に尾張藩帰還命令により出身地の赤津村に戻り、利右衛門は唐三郎と改名し、唐三郎家の家祖となりました。屋敷地・窯場・扶持が与えられ、苗字帯刀も許されていました。唐三郎家は家祖利右衛門景貞以降、累代 13 代に亘り「唐三郎」を襲名し、現在も唯一御窯屋の系譜を伝えています。

作助陶房

赤津窯の加藤作助家は、慶長年間（1596 ～ 1615）年に美濃国から帰村した加藤利右衛門（初代唐三郎）の弟景元を家祖としています。初代作助（景清）は景元 7 世にあたり、寿斎と号しました。『をはりの花』には、「性来陶法の妙手として、父の家を継ぐや作助と改め、大いに業務を刷新せり、其製する処の器ハ古法に倣ひ、多くの茶器又酒器の類を造る。其作皆高尚にして雅致に富む」と記されています。そして、2 代作助を継いだのが景義（号：春仙）で、3 代精一（号：春山）、4 代紀彦、と継がれ、現在の 5 代作助（「陶芸織部・黄瀬戸」で愛知県無形文化財保持者）へと受け継がれています。

大目（おおま）神社

大目神社は巡間町の鎮守の森に座し、赤津地区の氏神として敬われています。祭神は八柱御子で、江戸時代は八王子社と呼ばれていました。創建時期は定かではありませんが、『延喜式』や鎌倉時代初期に書かれた『尾張国内神名帳』に記載されている古い神社です。社殿裏側には大目神社古墳があります。石造鳥居（市指定建造物）は、笠木が二重となる明神鳥居で、反りをもち、柱が内側に傾いています。「宝暦５年（1755）乙亥九月吉日」の紀年銘があり、江戸時代に建てられた市内石造鳥居２基のうち、山口八幡社の石造鳥居（延宝５（1677）年銘）に次いで古いものです。

赤津の大松

▲現在の大松

▲以前の大松

通称「赤津の大松」と呼ばれていたクロマツは瀬戸の名木として知られ、赤津のシンボルになっていた大木です。その証に、大松近くの交差点は「大松交差点（現：赤津交差点）」とされ、現在も名鉄バスの停留所は「大松」とされています。このクロマツは火災により一部が損傷し、上半分を失ってしまいました。しばらくの間は下半分は残存していましたが、その後、立ち枯れ、現在は根元の切り株が残っているだけとなってしまいました。

万徳寺・松原塚

太子山万徳寺は浄土真宗高田派に属します。正応元年（1288）に海円によって開かれたと伝えられています。かつては豊田市猿投地区の越戸町に万徳寺があり、赤津に移動したため豊田市に「越戸」の地名が残されたと伝えられます。赤津に移った当初は太子堂だけの小規模な寺院であったと考えられますが、松原広長（P61 今村城跡参照）が田畑寺域等を寄進し、寛正 5 年（1464）に寺領・『聖徳太子伝暦』5 冊・『聖徳太子絵伝』4 幅を万徳寺に寄進するとともに、寺の客殿・太子堂の建立も行ったとされています。太子堂の左手には文明 14 年（1482）に自刃した松原広長の首を納めた松原塚があります。旧暦 7 月 22 日は太子の縁日となり、現在は 8 月第 4 日曜日に太子祭りが行われています。

聖徳太子絵伝（市指定文化財 / 絵画）

松原広長は、寛正 5 年（1464）に寺領・『聖徳太子伝暦』5 冊・『聖徳太子絵伝』4 幅（今日伝わる絵伝の第 2・3 幅は江戸時代の補作とみられます）を万徳寺に寄進するとともに、寺の客殿・太子堂の建立も行ったとされています。万徳寺に伝えられる『聖徳太子伝暦』『聖徳太子絵伝』は、聖徳太子信仰を重視する真宗の中でも数多くのものがみられますが、定型的な「真宗系」のものとは異なる「南都系」に属し、岡崎市の満性寺旧蔵の絵伝を写したものと考えられます。

長谷山観音堂

創建年代は不明ですが、土地は太閤検地の際にも免祖地となっているため、江戸時代よりも前の創建であったと考えられます。本尊は十一面観音で、年 3 回のご開帳があり賑わいます。戦前には例祭が 11 月に行われていましたが、戦後は行われなくなり、地域の夏祭りとして復活しています。城東西国観音三十三番札所の一つとなっています。

▲鐘楼（国登録文化財 / 建造物）

▲性空石

雲興寺

大龍山雲興寺。曹洞宗。本尊として釈迦牟尼仏を祀っています。至徳元年（1384）天鷹祖祐禅師によって開山され、当時の堂塔（七堂伽藍）は、足利 3 代将軍義満公の帰依によるものといわれています。応永 6 年（1399）2 代天先祖命禅師の時に悪鬼が出没して人命を奪ったため、禅師がその鬼に般若経の無性法の義を授け「性空」と名付け、「性空」は将来盗難鎮護の守護神になる事を誓って盤石を残したという伝承があり、門前には「性空石」が残っています。毎年 4 月に開山（建造物）忌、性空山神大祭があります。境内には文化 7 年（1810）に改築された鐘楼があり、国の登録有形文化財になっています。

瀬戸窯跡 小長曽陶器窯跡（国指定史跡）

もともと 14 世紀末葉から 15 世紀初頭に操業した窯ですが、その存在は古くから知られていたようで、江戸時代の『東春日井郡赤津村絵図』には窯場として「小長ソ」の名が記され、天明 8 年（1788）に完成した『張州雑志』には「藤四朗藤九郎時代古窯地名」の一つとして紹介されています。また、同書には「平・小長曽の窯元禄 12 年（1699）、（藩主の）命ありて彦九郎これを焼く」と記されていることから、室町時代の窯を江戸時代に再利用したことが明らかにされています。現在、本窯跡は国の史跡に指定され、窯体は覆屋で保護されています。

猿投（さなげ）山

瀬戸市と豊田市の市境に位置する標高 629 m の山です。猿投山は、恵那山地の隆起帯の南西延長部にあたり、北側を猿投山北断層、南側を猿投－境川断層によって、周囲より高地となった地塁山地です。「猿投型花崗岩」の名で示されるように、全山が花崗岩から成っています。山間にはいくつもの小さな清流が流れ、瀬戸市側の山麓にはアカマツを主体とした雑木林、山腹にはヒノキの造林地があり、市境を越えた山頂付近の西の宮、東の宮あたりは樹齢 100 年を超える大きなスギがうっそうと茂っています。また、豊田市側の山腹には、国の天然記念物に指定されている菊石（球状花崗岩）がみられます。

東京大学生態水文学研究所（東大赤津演習林）

東京大学愛知県演習林は、大正 11 年（1922）に仮事務所を瀬戸町に置いて業務を開始し、大正 12 年（1923）から穴の宮において量水堰堤建設工事を開始し、大正 14 年（1925）から気象観測、量水観測を開始しています。昭和 40 年（1965）には事務所を瀬戸市五位塚町に、宿泊施設は瀬戸市北白坂町に移転します。その後、演習林は農学部の附属施設と位置付けられてきましたが、平成 13 年（2001）の改組にともない大学院農学生命科学研究科の附属施設となりました。生態水文学研究所の赤津研究林（745 ha）内には量水池、作業所・宿泊施設があります。ここでの量水データは 80 年以上にわたって蓄積されています。

凧山つばきの森

「瀬戸椿の会」は瀬戸市の花「つばき」を介して、多くの組織や団体との交流を図って新しい文化を生み、瀬戸市各所につばきを植えて多くの見学者を招き、まちの活性化を図ることを目的として、平成 18 年（2006）に設立されました。「瀬戸市を日本一のつばきの街にしよう」をスローガンに、つばき苗の配布、学校や公園などへのつばきの植樹、つばき展を開催する等の事業を行っています。瀬戸の里山に自然に咲くつばきを表現するため、雲興寺の南側に「瀬戸赤津・凧山つばきの森」を平成 24 年（2012）開園しました。竹林、杉と桧の森、雑木林、ため池の間に 3,000 本のつばきを植栽し、その間を遊歩道で結ぶ、約 5,000 坪（16,500 ㎡）の公園です。

赤津地区の遺跡

惣作鐘場遺跡

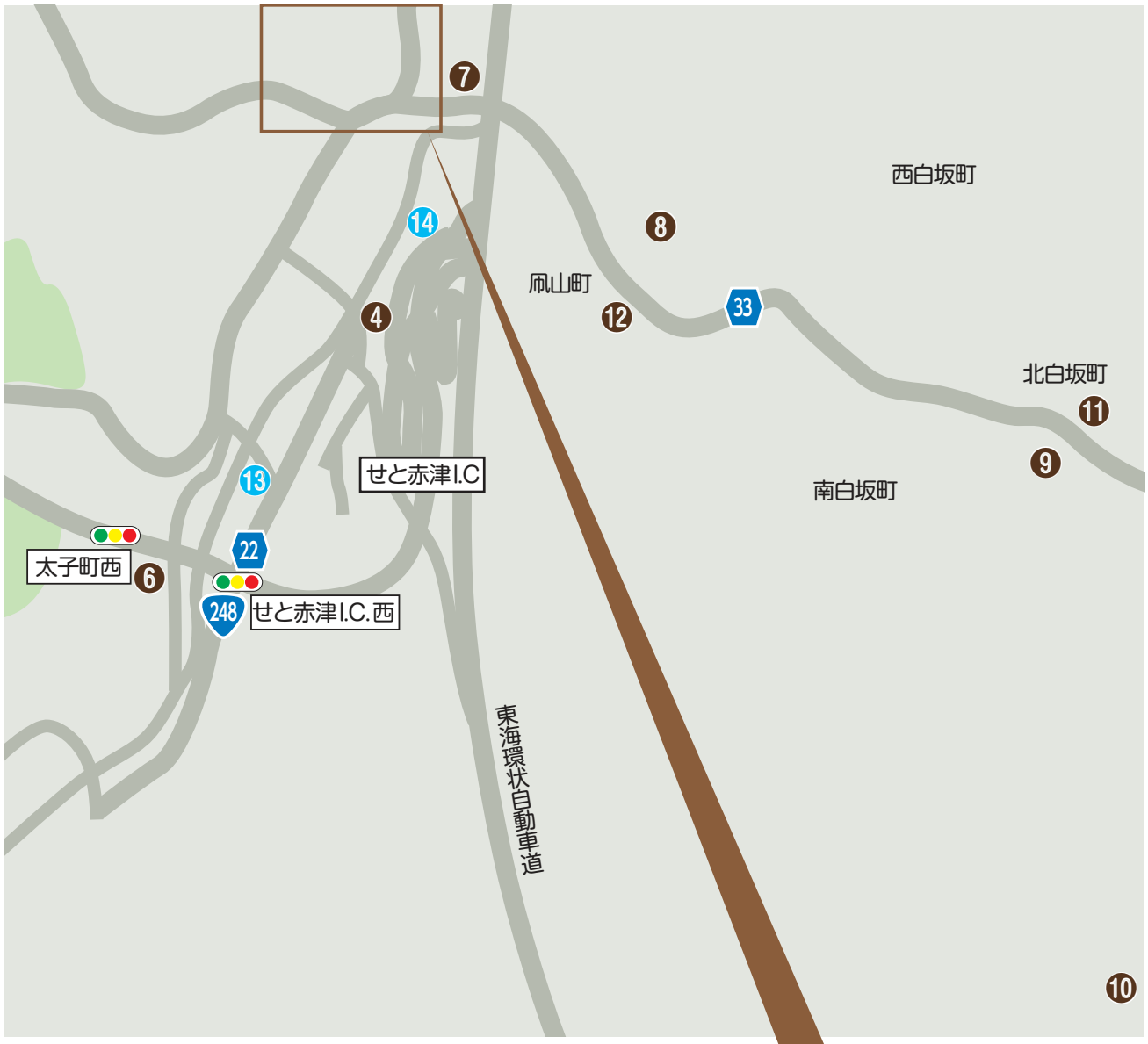
（愛知県埋蔵文化財センター提供）

遺跡は赤津盆地のほぼ中央、赤津川左岸に形成された河岸段丘上に広範囲に広がっています。道路建設工事にともない約 30,000 ㎡ が調査され、その結果、後期旧石器から江戸時代に至る市内最大規模の集落遺跡であったことがわかりました。現在の「せと赤津 I.C. 西」交差点あたりに縄文時代の集落、古墳時代後期から古代にかけては 100 棟に及ぶ竪穴式住居跡が確認されており、一大集落が形成されていたことが明らかになりました。また、戦国時代では幅 8 mにもなる大溝と、それに区画された掘立柱建物跡など戦国期の城館跡を思わせる遺構も確認されています。

瀬戸窯跡 瓶子陶器窯跡（国指定史跡）

赤津川の左岸にある、標高 195 m ～ 210 m の丘陵斜面に構築されています。17 世紀中葉～末葉にかけて操業した窯体 2 基と工房跡、失敗品を捨てた物原が発掘調査によって確認されています。2 基の窯体のうち 1 基は江戸時代の代表的な窯である連房式登窯、もう 1 基は戦国時代の大窯と連房式登窯を連結させた特殊な窯であることが明らかにされています。また、本窯跡からは尾張藩士の名が書かれた陶片「付け札」が多数出土しており、藩士の注文品を生産していた窯として注目されています。現在、国の史跡に指定されています。

赤津地区地図



❶赤津焼会館（P65）
❷唐三郎窯（P65）
❸作助陶房（P66）
❹大目神社（P67）
❺赤津の大松（P67）
❻万徳寺（P68）
聖徳太子絵伝（P69）
❼長谷山観音堂（P69）
❽雲興寺（P70）
❾小長曽陶器窯跡（P71）
❿猿投山（P72）
⓫東京大学生態水文学研究所（P73）
⓬凧山つばきの森（P74）
⓭惣作鐘場遺跡（P74）
⓮瓶子陶器窯跡（P75）